

# 平成 26 年病害虫の発生と防除

農林水産省消費・安全局 植物防疫課  
農産安全管理課農薬対策室

## I 天候経過の状況(気象庁報道発表資料より抜粋, 図-1)

### 1 2014 年(平成 26 年)冬(2013 年 12 月~2 月)の特徴

(1) 東日本と沖縄・奄美では、1 月下旬から 2 月はじめを除いては寒気に覆われることが多く、気温は低かった。東日本では 3 年連続の寒冬となった。北・西日本では平年並だった。

(2) 上空の強い寒気の南下は一時的で、日本海側の降雪量は北日本の山沿いなどを除いて全般に平年を下回ったところが多く、特に北陸地方の平地では平年を大きく下回った。

(3) 2 月上旬と中旬にそれぞれ 1 度、低気圧が発達しながら日本の南岸を通過し、太平洋側では広い範囲で大雪となった。特に、14 日から 16 日にかけては、関東甲信地方を中心に過去の最深積雪の記録を大幅に上回る記録的な大雪となった。

### 2 2014 年(平成 26 年)春(3~5 月)の特徴

(1) 北日本から西日本にかけては、期間を通して高気圧に覆われる日が多く、春の日照時間がかなり多かった。東日本日本海側、東日本太平洋側、西日本日本海側では、統計を開始した 1946 年以降最も多かった。

(2) 東・西日本では、寒気が南下し低温となる時期もあったが、3 月下旬と 5 月下旬に南から暖かい空気が流れ込み、気温が平年を大幅に上回ったことなどから、春の平均気温は高かった。沖縄・奄美では、冷涼な高気圧や寒気の影響を受けて気温の低い日が多く、春の平均気温は低かった。

### 3 2014 年(平成 26 年)夏(6~8 月)の特徴

(1) 夏の平均気温は、西日本では、2003 年以來 11 年ぶりに低かった。一方、北日本、東日本では 5 年連続で高く、沖縄・奄美では 2 年連続で高かった。

(2) 夏の降水量は、北日本、西日本太平洋側ではかなり多く、東・西日本日本海側で多かった。

(3) 気圧の谷の影響と太平洋高気圧の西日本付近への張り出しが弱かった影響で、西日本の夏の日照時間は

かなり少なかった。

### 4 2014 年(平成 26 年)秋(9~11 月)の特徴

(1) 北日本から東日本にかけて大陸からの移動性高気圧に覆われ、晴れる日が多かった。このため、北日本と東日本日本海側の日照時間はかなり多く、東日本日本海側と東北地方では 1946 年の統計開始以来、秋としては最も多い記録を更新した。

(2) 沖縄・奄美では、先島諸島を中心に高気圧の勢力が平年より強かったため、気温がかなり高く、降水量が少なかった。

(3) 北日本と東日本では、近年、秋の高温が続いていたが、9 月を中心に大陸からの冷たい空気を伴った高気圧に覆われる日が多く、2009 年以來 5 年ぶりに平年並の気温となった。

(参照)

気象庁ホームページ

<http://www.jma.go.jp/jma/press/index.html?t=1&y=26>

## II 作物別の病害虫発生状況の概要(表-1)

### 1 水稲病害虫(表-2(1)①; 図-2, 3, 4)

**病害:** 縞葉枯病は、冬期から春期の調査で、ヒメトビウンカ越冬虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒率が高かったことから、発生が多くなることが懸念され、2 月下旬から 5 月下旬に注意報が茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、神奈川県 の 5 県から延べ 6 件発表され、防除が呼びかけられた。

いもち病は、西日本を中心に 8 月上旬ごろから多雨、日照不足となり、本病の発生に適した天候が続いたことから発生が多く、警報が鳥取県、山口県、福岡県、佐賀県および大分県の 5 県から、注意報が 17 府県から延べ 18 件発表され、防除が呼びかけられた。なお、鳥取県では平成 15 年以來の 11 年ぶり、山口県、福岡県、佐賀県および大分県では平成 5 年以來の 21 年ぶりの警報発表となった。

**害虫:** トビイロウンカは、6 月末から飛来し、8 月上旬ごろから各地で発生が多く、警報が兵庫県から、注意報が近畿、中国、四国および九州の 10 県から延べ 11 件発表され、防除が呼びかけられた。

斑点米カメムシ類は 6 月下旬から 8 月下旬に北海道か